優秀賞

選挙権の年齢引き下げを考える

ひたちなか市立勝田第一中学校　三年
佐井川紫穂（さいかわしほ）

「今日からあなたに選挙権を与えます。」と言われて、私は喜ぶことができるだろうか。そう考え始めたのは、選挙権の年齢を引き下げる見通しがあることをニュースで知ったからです。私は選挙権を引き下げることに反対です。なぜなら「もし私が選挙に参加できるなら…」と考えた時に、喜びよりも不安を覚えるからです。

先日行われた大阪都構想の住民投票率は六十六・五パーセントでした。大阪住民の構想に対する関心の強さを感じました。しかし、それでも年齢別にみると、二～三〇代の若者はあまり投票に行かなかったことが分かりました。つまり若者の投票率が低いのは、最近の選挙の傾向であるようです。

この現状の解決策に選挙権の年齢引き下げがあるとしたら、それは疑問です。ただ単に投票率を増やすことに、何の意味があるのでしょうか。私は、投票率を上げるためには、日本国民の選挙に対する認識、つまり自分達も、参選するという自覚なしに目的は果たせないと思います。

選挙権を十八歳以上の日本国民に与えれば、分母、つまり総有権者数が増えるのは確実です。しかし、分子、つまり投票数がどれくらい増えるかは分からないと思います。むしろ、現状の政治不信や政治の無関心を放置したまま分母を増やしても、逆に投票率が低下してしまう可能性も考えられます。

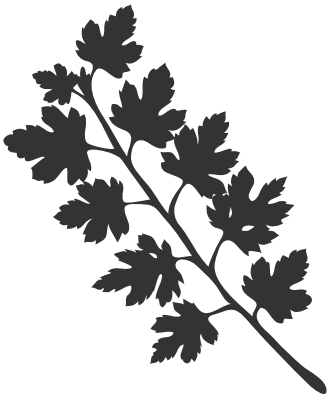
以前歴史で、一九四六年に婦人参政権が付与されたという事を習いました。その当時は、女性が政治に意見を述べるという事が認められていませんでした。そのため多くの女性が選挙権を求めて訴え続け、選挙権が認められた時には、大きな感動と喜びがあったようです。しかし、今十八

歳の人が選挙権を手にした時、そんなに喜ぶでしょうか。いえ、きっと、制度が一つ変わったというだけで、何の疑問も持たずにすんなりと受け入れてしまうでしょう。私は、それではいけないと思うのです。もっと、選挙に参加できるという喜びと、責任を感じなければならないと思います。一人ひとりが自分達の意見をしっかりともち、その意見が政治に反映されるという権利に期待をもって、選挙に臨めたらいいなと思います。

ではどうしたら政治に対する関心を深めていけるのでしょうか。私は、小さい頃から選挙があると両親と一緒に投票所に行っています。小さい頃の私は、何を選ぶ所なのか、もちろん理解しているわけではなく、両親の行動をただ見ているだけでした。しかも、二人とも誰の名前を書いているのかを教えてくれることはありませんでした。しかし、真剣な様相で名前を書いているのを見て、選挙は大切で必ず行くものだと感じる事ができました。

また、最近、母の勤務する病院でのこんな出来事を耳にしました。入院中で闘病されている患者さんがどうしても選挙で投票したいと言ってきたそうです。外出もできない状態であったため、法に基づいた手続きで、病院の中で投票されたとのことです。この話を聞いて、私は闘病中であっても有権者である事、国民としての自己の選挙に対する責任の強さを感じることができました。

選挙で投票することの深い意味や責任は、急には培われないと思います。身近な存在である大人が行動を示し、何度も話して聞かせていく中で、私達子供は徐々に政治や選挙を理解していくのだと思います。何の準備や心構えなしに与えられた選挙権は、ただ郵送で送られてきたダイレクトメールと同様に受け取られてしまうのではないでしょうか。

これらのことから、現状のままで選挙権の年齢を引き下げることに、私は反対です。むしろ、若者が政治に関心をもち、選挙できる喜びや責任を感じられるようにしていくことが、重要だと思います。

そして、自分の意見をしっかりと持ち、一人前の大人として認められる若者に、私たちはなっていかなければならないのだと思います。